

葛本集

乾

序

余は乃ち酒人なり。

左に蟹螯を持ち、右

に酒盃を挙げ、世の

所謂俳諧の詞を學ぶ

暇なし。然りと雖も

紙上墨を有つ者は、

瀏覽せざるを得ず。

頃者、鈴道彦撰する

序

余乃酒人也左持蟹螯右  
舉酒盃無暇學世之所謂  
俳諧之詞雖然紙上有墨  
者不得不瀏覽焉頃者觀

所の篇本集を觀るに  
言々句句風致あり。

以て人の耳目を悦ば  
しむるに足る。是に

於て酒間或は其句を

摘て、以て文字飲の

具に供し、毎に豪興

を添ふ。甕頭に醉倒

するを覺えず。因つ

鈴道彦所撰篇本集言  
句皆有風致之以悦人  
之耳目於是酒間或摘  
其句以供於文字飲之  
具每添豪興不覺醉

て此言を其端に書す

爾。道彦は仙臺の産、

舍を金令と號し、江

戸に僑居し、其技を

以て世に鳴ると云ふ

鵬齋老人識

倒甕頭矣曰書此言于  
其端爾道彦仙臺之産  
舍號金令僑居于江戸  
以其技鳴于世云

鵬齋老人識

## 題

## 辭

一 祖神の風徳よつの海にあふれてければ、今の金令舎がどき七ツ子の口きくやうなるほ句共の、恥かしくももろ國に聞えて、かの集この集にのせくはへてもてなざるゝ、忝なしとやいはん、めいぼくとやいはん。且其多かる中には、文字をあやまり、手爾於葉をそこね、人の句をおのれが名にしるし、おのれが作を人の名におしとられたる類若干ぞありける。いでやにしに東に天さかる鄙人のわざならずも、聞づていゝ傳に流轉せし物の、強ちにとがむべからずといえども、道に執するの心にとりて、是ほど口をしくうとましき事はあらざるべし。夫山がけのうす紅葉こき紅葉杵はち檜柿かへてさまゝなるに、薦の蔓のこれかれとからみまつはり、高きにひくきに、草とも木ともわかちがたく染なしてあやしけれども、一度其根によりて一筋を引よせたらば、是が蔓とも、渠が枝とも、あきらけくわかれ侍らんか。是の集に標題して呼そむる薦のものと微意なるのみ。

一 俳家往々句集有。歌に家ゝの集有と同じく、其家の風吹絶んを悲しむより、うけつぎたる家の子、傳へたる門人等の致すいさをしにぞ有けれ。又別に一家有、名利之助が田地持廣げ、瓜も茄子も作り取なる句福者の、我をしられて悦こばんは、芽出度今生をこそ言

べけれ。化して虫に鳥にも成なん、耳に何事をか聞何事かを思ふべきとて、身みづから撰み定めて、何某が句集などいゝ句しり時めくぞ、人の目の鞘はづきするの業なりけるや。後の世こそ恥かしけれとて、一期の歌ども焼すてける人の心の清らに聞ゆるといづれぞ。さて金令社裏に筆まめの護物と云此道におゐてのしれ者有けり。かの正徹法師がなからんあとの草根集をや心にひめたりけん、右に左にありそ海の、早稲に晩稲に拾ひ集め書あつめつゝ、年ごろふくよかなる楓だてして持けるを、さら／＼とこの薦の本の料に斗よせられけることの是非なきながら、半途にしてかゝる目に逢は、ほとゝぎす鳴やなかつの卯月空に、青さし刈られし心地すとぞつぶやくめる。

一 前に云文字てには等、動もすれば相違して諸集に出されたるの多きを、改め正さんの思を企つるにいづるの薦の本なりければ、羈旅感偶に生れし物の常の題詠とまざるまじきの徴を慇さんが爲に、はしづくりを載てながきを厭はず。其日其席の證にたてゝ、自他の作分明ならんが爲に、人名を記に残さず。見る人他の家の集にくらべて、煩らはしと

云事なかれ。

廿五のものと春之部

改正

すらく／とあくる名なれや玉の春  
さほ姫や長柄のはしは絶たれど  
元日句なし。二日に題す。

笠買んけふは翁の華のはる  
斧の柄も朽んこゝちすはつ暦  
鰻に來し顔を洗ふて御慶哉

梅若寸來の初懷紙には、雞  
筆玉人等の一字を分て、題  
に探り侍る。

大和ぶり玉のはるとも申けり  
かき初の鐵手あくなよや硯  
はつ春は菜うりも來ぬやおもしろみ  
立松に來てもさはるや四十雀

よしみつ御寺に年籠の通  
夜申事旅の冥加ある我々な  
りけるかなや。晩念同音に  
となへ、御戸きり／＼とひ

らける文化三年のたゞいま  
なりけり。

初としの涙も恥る日の御座  
正月はみなが足袋はく月夜哉  
梅翁の塚によるさへ春ごゝろ  
松過や小ひらめなどのとれて來る  
万歳やはたご物くふ顔もせず  
万歳や松たてさせて來る氣韻  
豆畑のあとに鬼の子日かな

七種

わか菜の夜跡戀しくも更にけり  
椿をく折敷もけふは若菜哉  
宗門も氷ると間に今朝の芹

謝壽星寄白鹿之圖

埤雅曰。鹿乃仙獸。性能自  
樂。角下必懷瑞。蓋有蒼有  
白有玄。皆千歲之後而所變  
之文色也。壽星豈不愛乎。

この遊見て後ひらはつ暦  
春風

はるかぜや日陰の芹も打けぶり

春風に我名かへばや京太郎  
よき人のよき中に似し春の風

春の日や松葉搔てもあそぶるゝ  
ちらほらと松も歩行や春の野等  
山の道ものどかさうなり杵枕

霞・

月雪の外に霞の朝ぼらけ  
小池にも汀をなして霞む日ぞ  
霞日の風さはぐ迄寐たりけり  
和讃でもしらはひかふに月霞む

登雲雀うそなんだ

鶴龜のうぐひす聞て居にけり  
黄鳥の汐にまかれし小藪かな  
鶯の妻鳥さぞや聞をらめ  
うそ鳴や木がくれ初る梅が窪  
如意輪の御貌日永し鶯の鳴  
山陰も空さへあればなく雲雀  
ひな疊舞ぬひばりも空に聞ふ  
春の人に鶯の草ぐきをられけり

猫戀

どの屋根の窓がおもひぞねこの鳴  
この頃はつらも洗はすおとこ猫  
山ひとつあなたの猫の來る事よ  
火傷ねかくても春はわすれぬか

白魚

千代倉も箕でははからぬ白魚哉  
しらをの歌よみたがる内儀哉  
白魚の水すてたれば草のもえ  
白いをの孕みてふとく成にけり  
榛の木の花見に來ませしとみ汁

梅

山鳥の梅さはがして立去りぬ  
三とせ見ぬこちもすなり梅花  
宵の梅増賀の床も匂ふべし  
隠亡が梅も咲けり千代の春  
せつきける昨日のくやしくて  
ちりて後おもふに梅ははやりし  
子ごゝろに覺えしはそもうめの花

さめくくと泣た笑顔や谷の梅  
輪かさりや梅にもひとつかけける  
うめの花苔こぼるゝくせの有  
方丈はまだ水仙やうめの花

梅屋敷

さす傘の江戸は梅見も群にける

凍笹に小鳥の糞もうめの花  
久しぶり云て並ぶか梅つばき

椿

一はるの花を持ける椿かな  
庭の椿果報やけてさかぬ哉  
億良等か古郷なれやちる椿  
とかくして人目とぼしき椿かな

柳

とり分て荒たる宿の柳かな

曾我野の雨期、つくばの道  
隣、みちのくの文卿、右雄  
の茶人、さて年々庵いづれ  
もすぐりて左きゝのしれも

の共、居並びて汲かはすに、  
なみくの事言出て、この  
春光に恥かゝすな、とひし  
めく漫興なり。

名残なく雨のはれたる柳哉

田にし鳴鶴なき頃は草わかみ  
はつ草やわすれし史を見るこち  
あそぶ子の鈴がなるなりくさの春  
ふる郷にこんな道あり春の草  
夕かけやをるほどになる蔭の蕨  
つくくしつむや椿の片手にも

如月

きさらぎや内儀の留主の小酒盛  
衣更着や裏からみゆる御路次町  
如月や毘沙門堂の普茶に行  
きさらぎや釣瓶にあがる井の小鮎

孔子盗跖一塵埃。君のみた  
だくうらやむべし。

春の月あとへ年とる御顔哉

うがいして娘寒いかはるの月  
業平の一期に似たり春の月  
家かけなどに見そめてをかし春の月

かしこにも人行けりな山を焼  
飾焚やかまはぬ事になく鴉  
どちからも田中の神やかざり焚  
わか松に鶴の立たる春寒み  
雪解を見はりて居るや岨の鳩  
春の水まだ小ぐらきに見ゆる也  
霞より降ぞまとのはるの雨  
うちぬれぬものこそなけれ春の雨  
たれこめて白かみ恥ん春の雨  
春雨の漏家もとなら梅が崎  
はるの露いつの露よりまどかなる  
便船もいひよくなるや事納め

風巾

几巾すえぬ空とてはなし南吹  
切風を乗せて來にけりもどり駕籠

山居

日よければしたしき里の風が来る

紅梅

紅梅をけさは佛に手折けり  
紅梅やどこかの野火に日のかげり  
紅梅やあれこれとして狭き庭

菜の花や薫の花や小鳥ゆく  
たんぽゝや瀧よりうへの里の春  
蒲公英や菜に行蝶の道次手

桐生足利と行過る頃

はたをりも胡葱結べよい日和  
摺臼をく軒のひまさや母子ぐさ  
熊うちも鋤かつぐ日か薫ちる  
まよひ子も死ぬまい時ぞはこべ咲  
三葉まではたしかにほぐすさし木哉

雉子

草先や小家のかけにもきじの聲  
酒をりの桶も若やげ雉子の聲

雉子なくや人を身にする舟の闇  
ねこの子の雉子に逃こむ戸口哉

歸雁

雁なくやおく野の鹿も歸るとて  
ゆく雁にかざしそめたる扇かな  
門田から立しがやがてゆく雁か

なけ田にしさらす垣根にならぬうち  
螢が家の穂垣小高し鳥さかる  
春の鳥みな妻もちに見ゆる也  
關寺のいとけながるや雀の子

牛込穴八幡の境内、市中を

去事咫尺ながら、林泉とこ  
しなへにふりて、さらに他  
山のおもひをなさしむ。

蝶

角落す鹿もそこらの崩れ土  
ほろ／＼とこぼれかゝるや草の蝶  
子をするとな聞はいやしやてふの腹  
よべば来るよしあれかし飛こてふ

蛙

嫁くれし家をとまりまいてなく蛙  
からころとなくは妻ひく蛙かな  
其聲を頼てあかれなはつ蛙  
足もとの餘寒にまけな啼蛙

雛

よく見れば坊が妻なり雛買

逸昌行脚せしころ

蕨敷て雛のむかふへをかれけり  
米をつく隣もありて雛の宿

打つゝくのみを梅若参りかな  
永き日や足の弱さにあそびあく  
舟木伐と聞さへ遅き日頃かな

内外につけてあふなけあら

ぬ一蕨のさらば笠に

このもしや親のつきやる芳野行

花

はつ花のちる時人に見られける

誰が馬のたが馬よぶぞ花の山  
花の寺入口黒う見ゆるなり  
花に雨しかはあれども華の雨

鶴芝集中雨吟の時也。士朗  
と主客の坐をかえて出せし  
旅情の句。

雨にとはからざりけるを花の宿

莊嚴寺の満花、生滅々巳の

鐘の聲もまとしからず覺侍

りて、

いつまでもあらんけしきや花の寺

花の戸に巻て立たるむしろ哉

花を見るころは親をしえぬぞ

寫の眼もうちとけつらん花の空

寛永寺 玉句

ふる千代の花をまじへし薺哉

院／＼の薺麥も何石花盛

大八で米押す聲も花に鳥

東叡法王の御林あふぎ奉り

て

花七日風のはふり子召れけめ

花の上なる月夜も残さめや  
と、小風呂敷にへばりつき  
たる護物を引たつとて、

見残せや九品にあてゝ暮の花

傘さして講も聞けり花の山

唯識のたゞ中なれや花七日

曙や花のなさけの人に來る

花に風七つ小姫が手にもふく

勸進能ありけるとし

ちる花にたはけからばや鈍太郎

たれかれ誘ひ出たるけふな

るべし

宗貞がうきいふ友もなき花見

上野より信濃界行脚せし頃

花を見た御禮申さん薬師堂

頭陀と寐し冥加や花を二季越

花に見する心のほしや登しらで

木母寺

口をしく土堤に出けり土堤の花

酒折さして旅立おもひなり

ぬ。きて人ゝの離庭に、

ちる花に氣相見せけり小風呂敷  
花果て摘ひし樹ゝのけしき哉

櫻

あかるみへ出過てさびしはつ櫻  
ゆさゝと櫻もてくる月夜哉

不受不施の御寺も花はさくら哉

玉川にべく丸を主とせし頃

あたら松の利にもなるかちる櫻

桃

桃の花熨斗添すとも贈るべし

酒くさき鹿太が、ひとゑ梅

一重桃ひとゑ椿など題を探

らせたるに、

紅梅も過た野もせやひとゑ桃

御かこひの外は家中の桃のはな

山鳥はまだ冬で来る辛夷哉

ちりもせでなくなる木瓜や草の中

子そだてや木瓜にも尖をあぶながら

木つゝきも来ずなる筈よつゝし咲

あぶなげもわすれてゆらぐ磯馴藤

山かけや藤の下家又見ゆる

山吹

山吹や客の歸りてをしき時

やまぶきの咲て憐と云れけり

山吹やあれる律がもふもゆる

菫

わが戀は舞子の松の下すみれ

世は尊と道ゆきぶりに菫つむ

ある處にあるぞすみれは口をしき

藤垣の淺茅にしらぬ種のこと

ほれて咲そめけるを、

たらで住菴見たてしよ白すみれ

落窪に咲もこそすれこき菫

そら豆の花にせかるゝ扱茶かな

山人や薪にすとして木質植る

まさきの楓菴に、又來ずや

あるべき、侍るゝよしの年

はふるともなど、ちぎりけ

る頃

夢にせぬしるしにまくぞ蔦の種

地に油たれかころびて春のくれ

足利より笠かけ野越てける

時

高き代の松にふれけり春のくれ

行春

ゆく春や脊戸門明て麥の雨

春過し春や塙の松の聲

夏近になるや旅僧の白脚半

いらざる紫腰のまじはり、

藻にすむ虫の我からとは申

ながら、またやこりずまに

こかざるゝ苦しみ。やうや

く生路に走り出て、十時に

とりつく黄昏なりけり。

焼たかと門の蛙に笑はれし

文化三年うるま人まいりつ

きぬ。事どもなりて、明日明

日歸馬に水かはんと云。道のほど久かたのあめが外に見やらのなれども、家路とおもふ人へのの望しき押はからるゝ中に、一人のくすしはかなくなり侍るよし、遂に此地の北部にいまはしの形見を残すとなん。

万歳も悲しかりけりこのはなし

六歌仙讃

黒主

若年の松にもほしき名乗かな

業平

桑子にもならんと人の云よりし

遍照

嫁菜には何となさけを嵯峨戻り

小町

はこべらも實をもつ花は有てふに

康秀

春芽ふく林に史をくらべしか

喜撰

ひき鶴の脊にもせたしうしろつき

雞旦より人日までを云つゝ  
けてはべるを、句七種と申  
てこの十時庵にあつまるを  
せものどものする事なり。

一とせの元日せうぞさびはなし  
二日にも猶いねつまんぬかまくら  
殘雪といふもおどけた三日かな  
卯槌うつかけも見せぬや四日月  
松もはや五日になりぬはかま客  
はちの木を焚ても祝へ六日年  
しら魚にはまり過たるすゞ菜かな

### 蔦のもと 夏之部

東坡笠猪首に着なし、遠く  
はこばれたる胡準の執心  
をよるこぶ。

たが来ふぞ藤の裏葉になる小窓  
給にもおくれてさびし木かけ藤

十時又藤垣の別號あるに  
よるをや

旅人はとくすべきなりころもがえ  
夏來れば荒こそまされ松の菰  
ひとゑ着し人もちらほら鶴見橋  
あらためてふりよ卯月のすみだ川

鎌倉のみてらにて、政子の  
けはひけづりし給ふ(ひ)け  
ると云十二の手宮を拜む。  
この御方のゆゑしかりし一  
期のまとはしるべからずな  
がら、かれこれに書残せる  
ものゝはし／＼よみ覺へた  
るにてらしあはせて、思は  
るゝ事の多かる。

卯月にも疊らで罪を十寸鏡  
青簾檜垣の茶屋に参らすや  
麥名ます門川ほしやまきすだれ  
丈草句あり。下京をめぐり  
て巨燧行脚哉。我又あり。

深川に寺行脚せん佛生會  
うき人もいさゝせ給へ佛生會

夏に入るときけと衰れやいとま乞

夏に入て来ぬ人多し十時庵

同行雅秀が能見堂に待をも  
かまはず

景に又ひとつ六浦の麥黄ばむ

金澤にはたご喰ぬ人には、  
夏嶋も四望亭も知るべから  
ずながら、

なつ島を扇の下や四望亭

三嶋のおがまれ給ふかたへ  
に、應安二年としるせる鐘  
あり。こはこの地の主にて  
おはします、如來のものな  
りとぞ。彼放下僧が祈申て  
見知らぬ親の仇をしり得て  
うちはたしけるより、放下  
僧の薬師と申つたへはべる  
とかや。扉板敷いやふりに  
ふりてまことしやかなり。

御壺よりいざ出し給へほとゝぎす

おほけなき御佛を放下師  
のやうにいひなしたるも  
飽旅のながき日わすれな

るべし。

蓬生もまつ事のありほとゝぎす

柚の花にそばへてもまて郭公

青空やほのふと啼杜鵑

深川の汐先雨や子規

北堂のうつされまします龜

井戸に詣はるるかたへに、  
翁のいましめられて、そが

繩はおそろしの鬼の引しめ  
てうしろに立たる形と、そ

れに連添けるとみゆるをう  
なの、百八つまぐりてたの

もしげなる形とありけり。  
翁はつくしの白大夫にて、

神につれなかりけるみせし  
めとかや。をうなは引かへ

て、心を松のはにつゝむと  
神のうけひき給ふけるむく

ひなど、かなん文字して書  
て侍りければ、

婆ゝどのゝ小耳からばや時鳥

小石川小日向かけての眞景

水戸殿で飼はれたやうぞ杜宇

江上數峯青とは誰やらが神  
句のよし

蜀魂啼て江上數峯青

海松よりはなりのそからん郭公

草津の温泉道者になり侍る  
頃

あびせかけてなくや白根の子規

閑古鳥

ばさ／＼と飛あらはれつかんこ鳥

閑古鳥なくや終日遅ざくら

長き日に生れたやつよ閑古鳥

白げしの咲日の聲にかんこ鳥

閑古鳥啼や漕去籠一聲

鶯も老ぬさぞかし梅田枇杷

苗囀ふ年もしらずや行々子

汐先やよしきり騒ぐいなさ東風

古杉坡双鳥且秋香庵を先達

にして、三たり四人筈根路

ふみけるをり、秋暮亭を泊  
りに定む。日とに高く雨面

白かりければ、足靜かに洗

ひ鬘かきあげなどし、おの  
ゝあが家の思ひをなすと  
いへども、あるし葛三例の  
筆草とりに出たるにてなし。  
童曰磯に袖笠したる人の見  
へば必そなとん。

でゝ虫のふたつ過まで窓に顔

木曾の椅笠越の菅蓑をかけ  
て、道の神におがみ参らす  
べきの四阿を、藤垣にしつ  
らひける頃、

かはほりの遊ばん料になるな窓  
出そめし蚊を見て居れば喰ひけり  
小庇や鹽とられて蚊の迷ひ

胡瓜さへ苗でうる日をはつ鯉  
江戸橋はくゝらぬといふ松魚哉  
鮎提て家の遠さや朝のうち

みじか夜や大野の茅原音もせず

團扇もたで出れば貧しなつの月  
なつ山や片戸明たる裏の門  
夏山や紫つゝじ遅さくら

一休も毒いはざりし牡丹かな  
ちる逆も夜はちるなよや牡丹

牡丹の名あれこれとかぞへ

まはる中に、眞紅の崩れそ

めし花有、それが名は、

うちかけし袴に似たり京迎

芍薬や籠に翳啼日かけ家  
さゝ百合の窓のぞきする伏家哉  
百合寒し水乞鳥の鳴なべに  
濱かぜのけしにあれ込雀かな  
唐鳥の匂ひのす也罌粟の花  
貧乏も仕課せて見よ茨の花

杜若

手に折ていよゝ飽れずかきつばた  
この頃は雨にまけるや燕子花  
魚類でも法事はさびし杜若

高椽や見る人も居ぬ杜若  
さびしさや火を焚家のかきつばた  
庭にして卯花みばや田一枚  
ゑぼし着て卯花折しむかしかな

小雨村は吾妻の温泉守の雪  
をさけんとてくだり住處也  
四月八日を時として又山へ  
うつる。

卯花に明た戸もなし小雨村

葉ざくらや世にうき人の出ありく日

法親王の御築地なるべし

わか楓くれの御菓子屋参るころ  
曲水の茶色も過ぬわか楓

仙臺侯の尊とさなりけり、  
龍寶寺と申に文庫を置いて、  
見たき顔をたてるものには  
かよはせて見せらる。

桶ちるや七ツかぎりの書物よみ  
木も夢になりて茂るや壁の穴  
若ければ律の葉され見られける

ひとつ葉の下にも見する蔭り故  
はき木の物めきてたつ浅茅哉

筭や妙義の神巫が小風呂敷  
子にやりて露も持すや竹の親

おもひ出て葛蒲をやりぬ峰の寺  
都邊や手苗捨ててもあやめ草

所思

かぞいろや我にも太刀を飾られし

梅雨蒼々草刈か燐ひとつ、煙り

五月雨を何とかしまの御齋おもひ

さつき雨谷の小橋を願ひゆく

五月雨に水の手切し小寺かな

さみだれや金魚飽るゝ煤の漏

五月雨まけた守敏が執とならん

五月雨や眞孤見てのみくらす家

さみだれも湊になりぬうつぼ草

みぞろ木やしぐれてはこぶ旱月雨

九朴坊旅に大事の割子を  
忘れて、みぞろ木へもど  
る。

壱半山の日よりをうらなひ  
あてたり。

三重四重に吹や南雲の青嵐

合歡さくや世にあかれたる豆腐茶屋

富士川の合歡にとりつく家路哉

ねぶ咲や去年の六部の一周忌

紫陽花に夏は來にけり山の町

下闇や鴉のありく小草原

何虫の蝶かわづらふ木下やみ

康頼法師が寶物集よみ終り  
けるころ

世には寐ん夏刈蘆の丸屋して

まどこの藻に住なりや手長鰕

掻よせた藻にも花咲け魚津道

門ひとつ出れば麥刈苗はこび

早乙女よ夜邊の咄も盡ぬべし

植し泥もすまぬに米や黒葉さす  
わや／＼と植て去けり田一枚

水雞　ならびに鶉

聞きず顔してたゝかせんはつ水雞  
さ麻されば來すよ水雞はねちけもの  
谷の戸や鳥も來ぬ木に鳴水雞  
括られし咽わすれてや鶉の心

鐘の音の消るひまより飛螢  
螢火を蜘蛛の振舞ふ蘆家哉  
子ながらも鹿哀れる瘦さまよ  
殺さずばひはきもなせよ火申さす

草庵一名物有

日は見せし常夏月の筒なし井

けふこそは扇とるらめ氷室守

祇園會のけふによき名や心太

繋ぎ田も落つく今日か土用入

このつなぎ田は常陸のく  
にてうかし田と云たぐ

ひ成べし

あつき日や果なし坂の奉加鉦  
馬鹿鳥ののめりありくや雲の峰  
雲の峰大名宿に入かゝる  
葬禮の田中をゆくや雲の峰  
夕立の荏の宿ぞいそがしき  
淺澤や鳥のあとにも湧清水

水菰清ければ魚住ずと  
うけ給はりしが、人絶てお  
らざれば閑過てさびし。

江島

すゞしきや下駄も圓坐も二人前  
舟すゞし釣ばと思ふ蘆間く  
不盡が根も波やはこぶと海涼し  
宮守に歌問る迄すゞみけり  
馬なくや雲寐起よとハツ下り  
乙姫の床にもかえじたかむしろ

籠枕うつくしよしと云て寐ん  
どの友も帷子すがた四十めく  
玉笹の閨にはあらじ汗拭  
寐起から團扇とりけり老にけり

撫子園に若殿達の乗鞍きそ  
はれし夕の餘興を、

高椽や扇であふぐ馬の面

蟬

大日の格子もあく日蟬の聲  
蟬がなく出やうとおもふかたぐに  
瀧かけて聞ばかぼそしせみの聲

蓮

新部皇が一の見處や蓮の花  
朝朗露ゆりすえて蓮匂ふ  
浮蓮に魚乗らんとぞ守りける  
過たるは及ばざるの心を  
蓮池に満りさて見る處なし

撫子

蓬生やなでしこを草になしはてし  
常夏の日なたは馬も見捨るか

撫子によるひまもなし勢多の橋

畫貌や蘆火焚く家に取つて  
ひる顔や鞠子の汁もなき時分  
蟻のたぐ来るやゆふこの徑より  
はへもなき眞菰の花や御庫裏さま  
心に思ひける事を

直けれど麻の蓬はにほひなき

山の邊は夏もやすめぬ驚しかな  
漏軒の雨にもうれし蓼の露  
小灯で埒あく客や蓼の露  
瓜くふた口や寺子で寐たむかし  
脊の縫目かた寄て瓜を袖の土産  
寐るべしや梅干ほして一晝間  
ひと夜酒そも笋のそだつ時

御被

御被の夜七夕姫も櫛召すか  
御被して風ひくまいぞ菊之丞  
出直すや妻子を連て御被川

にあたる。

蚊の中に泣鬼見せつ眼の光り

大磯の虎が十九のくる髪に  
袈裟うちかけ、鎧やうく  
とふみ叶へたるが、袖の扇

や落しけん、口とりのわら  
はが取あげて、鞍の上にさ  
しのべ手わたしするの形か  
きたる繪の讀。  
富士をさへ見まじとかざす扇かな

暮の合歡その子ときし枝やそも

わかき人のいまはいひ置  
たりとて、伯父なりける人  
の許より、宣啓がなき跡の  
記念永く見給へとて、清女  
が枕の草紙を送りこされけ  
るに、老たる我にはしばら  
く餘所のものあづかる心地  
して、只ちたかたの世をの  
みぞなく。

はたる火の翌は誰が見んこの草紙

猿若勘三郎座にして、中村  
歌右衛門が七役を見にまか  
りけるに、七人連なるをも  
かしと、梅壽が傾城をいゝ  
出しより、螢は誰、たれは  
獅子といゝつゞくる事には  
なりぬ。さておのれは鑑爐



# 葛のあし秋之部

## 立秋

おもふにも過て涼しや今朝の秋  
文月や先露とよむ噺ぐさ  
鶯の子のおもひ羽生ん秋のたつ  
三日月の入さの松や扇をく  
星の朝やさしと見えぬ草もなし  
蛸はよき聲もてりほし今宵

妻ぼしたのまれてしや火とり虫

隆辰(達)節面白かりける席  
上也、をうなどもとりへ  
に今宵をしむ

願へとて七葉の梶を出されし  
すゞしとて星のしづくや諸白髪  
一つぶ降ても銀河のわたり  
とまるとなんうちかこつ小  
女に戯る

鵲があるではないか雨の星

星にかさふ色あり菴の酢はじかみ

八日の朝の事なるべし、し

らぬ軒端にこぼれちりした

にざくひらいとりて、

興風とよむさへ涼しほしの歌

はきき木もそだちとまるや盆用意

いとけなかりし弟を失なひ

ける年

人馴て雀はいとゞ盆の鳥

亭設紅花がら青菴や杉の笹

苳のよごしも哀れなり。

これやこの盆供に何か都もの

むかひ鐘藻に住虫も父またん

迎火や裏家脊戸家は子の多き

とある家にむかひ火見へて降雨か

盆過や粉ひき白にも風のたつ

煤いまだ葉生姜とりて青むしろ

日本武の御いさをしそこ愛

に感じ奉りつゝ、つとめて

むさし野を越る。

野火留の霧の降くる膝折か

稻妻

いな妻や大根蒔て雨をまつ

稻づまや猪もてあますやしき守

稻妻や駒がた堂は人の中

いなづまや楯よぶ聲のをり／＼に

稻妻やすさまじうなる辻が花

露

いつまでも珍らしかれよ露の秋

しら露や人はよく寐て起ん事

見ずしらぬやうに並ぶや草の露

夕かけや草もぬらさぬ露の玉

降雨の中にもをくや秋の露

情の餘りて感ぜらるゝ、と

あるさまのうかみて眼にみ

ゆるにおゐては、強ちに詞

のつゞきて、何がらのつや

／＼しからんをのみ心がく

下露やこれは夜啼泉の毛

無説上人ををしむ

朝露の佛としらで睦みけり

月過の露はひたものぬるゝなり

七夕も来ぬにはやちる木槿哉

心なき物に心を入るの作試

みてんと大原の茅薙がせが

むに

雨年の木綿に花かせちる木槿

脊戸の秋豆とさくらのむら落葉

ちる柳蘆も穂くせの付にけり

薙

朝がほも日毎はさかね片折戸

薙にすげなや御油のもとり裾籠

朝貌に野の月見せてあるゝ戸ぞ

宗因に夏紙衣あり

朝がほに我もはをらん秋紙衣

芒 井をはな

秋はみな芒になるや山の草

ひら／＼と朝霧乾くすゝきかな

泣たくば尾花がくれに空見べし  
日ぐれ迄日のさす寺の尾花哉

女郎花

念佛にもまた似つかぬや女郎花  
去ほどに萩ともふさず女郎花  
をみなへし何のすぐせに鑑かた響くさき

敗醬みづからこの草の漢名也。此

句持ける跡に知りたるぞ

少し口をしき。

萩の夕星の餘波もありげ也  
果はやき勸進能や萩の原  
見定めた處もなしや萩のはな

もとをりの其文が門に入に

對して俳諧をひねる

小車やみぞはぎや庵の七草す  
尼になりし人はたれく草の花

虫

なく虫の中へさしこむ馬の鼻  
見たきもの小石が下のきりくす

凡虫は聲をもて名によぶ中  
に、松虫鈴むしのみ違へぬ  
るは、後世にあやまりたる  
にや。

一聯兩赴(趣)

鈴虫よなど花にふる音はせぬ  
松虫よなど月にふく聲はせぬ  
かまきりの脊にもおぶさる蝨かな  
月草も實にこそなれいなこ飛  
芒刈るやうの音する蜻蛉かな  
蜻蛉の蠅をそゝるや舟の五器  
萩折つ尾花しこきつ小鷹狩

はつ月や烏帽子着し人のうしろ影  
月よさに送りぬ犬の伊勢参り  
月の雲行はよけれど夜のへらむ  
あばら家は月のもるにぞ住れける  
八十にあてゝ命やいく度月  
大原や月につんむく家一ッ

瀧本坊の面四睡のかた書た

るに

男にも嫁にも見せんこの月夜  
雲の月ぬけたところや諏訪の湖

待宵雨新篇

岩はなや鮎も翌の聲そゝげ  
待宵や浦島が笛のはなしせん  
長閑さの十五夜見べきまつ宵ぞ

良夜

けふの月さてもをしまぬ光かな  
名月や小ぬかこぼれし白の跡  
澄月も願ひし空か駒の里  
このもしやわづかの家の寐ぬ月見  
看經のうしろせはしやけふの月  
月見せよかくす事なき菫に寐て

老ては人にきはるゝなら  
ひ、蕭然として只東壁に漉  
酒巾をかく。

誰來なんたれも來ざらん月今宵

から櫓をあてしは丈草が庵  
の漏にこそ。この十時庵は  
その櫓さへあらざりけぬ。

うき秋や雨の最中と降盡す  
雨今宵天の原さへ見せぬかや

なよ竹の風煩らふて打ふし  
ける。梨の日にいかにやいか  
にと人のとひこしつるに、

十五夜を聞明しけり秋の雨

十六夜

いざよひは咄の多き夜なりけり  
十六宵や一霧もちし松が浦  
いざよひやしらぬ古郷に來た心

はつ汐や松の下なる後架みち  
汗かけてかき込飯や野分吹  
秋の暮焚火にものゝ見え初る  
小笹生に野菊の咲し朝寒み  
うそ寒や地窪うしとて越す隣

我家の珍らしうなる夜寒哉  
ある院に藝目召るゝ夜寒かな  
岡崎の橋に月すむ夜寒かな

甲斐歌がみな身にしむぞ夜を寒み  
我妻の貌白うなる夜寒かな  
臺所に傘のころつく夜寒かな

碓

唄なきはさる事なれや小夜碓  
河内路や情はらつきてころもうつ

古詩休あまたよみける心う

つりに

僧兒ありや窓にあたつて衣うつ

乙鳥の行空見する紫苑かな  
すがる臥野菊は折ふ枝もなし  
なでしこは糞虫が着て仕舞けり

蘆の穂に里離れする雀かな  
穂あし刈僧や其まゝ水滸傳  
犬藨のかぶせかゝるや釣の邪魔  
ひやくと地を這ふ雨や紫蘇の花  
唐がらし鶉なく野のものならす  
坊が子によき齊せうぞぬかご飯

黍の中噓飛して誰か来る  
物へまいる道なりながら黍の出来  
粟の穂にかゝるけぶりのひとつ家

二世安樂としるせる小寺の  
鄙ふりなるべし

御佛の肩にも一把稻の秋  
須濱ありさて扇あり秋田づら  
早稻の穂や雀もしらぬ坊が作  
稻の香や鶯も眠りをさますべう  
早稻干すや道も小廣き關手前  
稻かけてけしきたりけりひとつ松

案山子

かならずよ案山子が立ば山の雨  
たつ案山子どの山松が久しいぞ  
我庵や門にかゝしを立らるゝ  
雨の聲案山子に袖をかはし行

鳴子曳里に成けり蘆に風  
山かせやどこの鳴子のむら雀

藤垣の藁ぶきに、用なき繩  
をひきかよはして、あなが  
ちに田家をまねぶ。

琵琶もたぬ雨のそなへよこの鳴子  
人のなす業なりなから山の引板

鹿

龍膽のくるゝかけより鹿の聲  
紅葉ふむ鹿は晝さへ鳴にけり  
鹿の音に月さしそへて澄夜哉  
小畑に鹿の音しめて閑庵か

雁

雁がねや星の便りもある日頃  
露の戸にあはたゞしさや雁の聲  
音づるゝ雁には江戸も雨夜哉  
はつ雁や宮嶋をかたりあふ夜頃  
雁啼やあやうき水も澄し空

今くふた麥腹さびし鴝の啼  
鴝の聲院の芙蓉を鄙にする  
鶺鴒の寒さもて來や蔵の陰

鳴啼でなくさむかたもある空ぞ  
立嶋におどろく小家のうしろ哉  
餅くふた馬の氣相やなく鶺鴒

后月

眞鶴の命よろこべ後の月  
後の月山里ちかくなるこゝろ  
木まくらを坊主にするか十三夜  
後の月片母持しこゝろ哉

詩僧を主としていたく更たり

十三夜や寐處あかるき障子窓  
蛸拾にはづれしくやしきな  
がら

後の月澄や二人がたび祝

日本の何某つくるとしるし  
てし南京もの、ある所にあり  
てあり。其筆とりける心の  
哀れは、かの仲丸の月に  
もいかでとおとり侍らんと、  
阿波の草史が物がたるに、  
外市を書て泣しか五郎大夫

長月の秋や小松も荒につく  
家ふたつ戸の口見えて秋の山

一瓢上人のひゆびにまねか  
れはべりて

炭そゝぐ水も秋すむ苔のうへ  
秋の日や柿喰過て腹のへる  
さびしさや塘にたまる山の雨

私曰。此さま秋ならずし  
ていつれにかまぎれん。

耳につく草鞋の音や秋の雨  
檢校の堀井手間どる秋の雨

菊

猶をしき山邊や菊の遍き日  
聞ましや菊咲よりの浮世事

英順野店無肴核

博酒堪沽豆莢肥

不盡すむや菊の日和を壺にして  
きくの香に云たてせうかこの硯  
萩萩に泣あきたれば菊の花  
菊の香にあらためてしや月夜ざし

小ぎく咲日なたになりぬ椎がもと  
しら菊にあたゝまりまつ十日かな

碩布の山住にて

には鳥のいく孫彦やきくの花

やきうは悉皆の獸をいれじ  
とてする也。小さき箱の蓋

やうの板を串の頭にさし  
て、そこ爰に立をく。山畑に  
とよめるやきしめ是なり。

焼帛は残る菊にもひかぬ哉  
雨露や明るわびしき末の菊

みちのくの百非坊一ひらの  
苔菰を贈るに、白川の關お  
ぼつかなくて、長月九日と  
いふにといき庵にはといき  
たる。

うち着せて菊守らふぞ敷すとも

紅葉

傳教のめでたさ見ゆる紅葉哉  
すさまじや紅葉を染る露の音  
しらぬ人もふりてぞみゆれ柿紅葉

振る鞭も蔦に瘦るや小坂越

小坂越は半田の金山を左に  
田羽の國へ赴く一條の難路  
也。乙二がほそ脚に覺あり  
とて歎。

梅干を藥にいふや蔦の宿

ひき寄て蟪蛄うつりぬ下り蔦  
うら枯や木竹ちらばる濱の町

むかし坊主小兵衛ありしが  
今又あり、

澁ならん坊主小兵衛が門の柿  
刈あとの柴にもゑむや山の栗  
さびしさや菌のかさの窪たまり

行秋

行秋や松葉こぼすを手持にて  
ゆく秋や鳴の羽根ねがき揺くいゝと  
たまに見る舟も行かけ秋暮る  
つごもりもなきに逢けり越の秋

心うき年にも有かな廿日餘  
り九日といふ春ぞくれぬる

と長能の歌もおぼえおきは  
べるよし、石海があらはれが  
るにぞ、人々見ならずとう  
けがふ。

蠅も居ぬ峠の家や九月盡

人として酒のみ習へ夜の梅  
と聞えしほとけの十七年忌  
吊ふ今にも、膝のうへ放ち  
給はざりし盃の、幻に残り  
てわすられざりければ、

さめやすき新酒はくまじ白雄來

蔦のもと 冬之節

時雨

番雁の畔もちかねるしぐれかな  
あり數の宮も藥家もふる時雨  
しぐるゝを夜となおもひそ鼠の子

木母寺はしぐれも夜くの方はずれ

淡白の處探りかたしと云か

みつけの阿含をよるこぶ。

旅すれば時雨の跡のあたゝまり  
灯もおかでよく寐る客や神無月

霜

霜がれや生姜も植てある小庭  
霜の空はねかえりたる氣色哉  
しもの鷺浦山しくもかなりけり

越の國ぶりを

置霜や日雇出て行錢五十  
霜の蕪かくまで庵をわびしめる  
花實はてし草と見つゝも霜悲し

いにしへは秩父の國と有け  
るよし、まこと左にこそと

しられて、公私の外なる空

山閑地若干多く、便にまか  
せ力にかなへてまくななど

別とるをかせぎ山と云。さ

て人目も草もとよめりける

山里のいかにもさびし。

おく霜や鳥もなかなぬ稼山  
竹もなき藪の垣根のはたれ霜

朝あれにこりて戸ざせし小春哉

蘆の家のとく冬なれし小はる哉

こがらしや雲水てらに草鞋とく

寺建る僧のかり居や冬日なた

冬空に只見る富士の命かな

此句水無月に聞ても寒し

と吳羽の吳老が返事しけ

る。空はめにてや有け

ん。

冬の月櫃の下みち見ゆる也

只すみにすみて小くらし冬の月

月も見ぬ十夜参りの脊中つき

草庵實趣

しぐれ會や客を連來て錠明る

像前に道を祈りてこゝろに

おもひし事を

ふる霜の我なれさても雁翅脛

よき友の四のうみにみちた  
るは、おのれ金令がとこ

(徳)にあらず。

翁忌や箸も飛驒からもらひもの

小千谷由都留亭時雨會百員

巻頭

會式めく事にもなりぬ翁の日

恵比壽講この初雪はいくらにす

人も合器もすりはけてさて納豆汁

よしありと見ゆる家もなし冬構

鴨のなく脊戸田へ千里冬かまへ

玉珂老人の古き手利にう

なづかせし句

男めが鯨はつかであじろ守

押並びてかゝる事する網代守

かぞへ日の仕やうもないかあじろ守

よしことの上びを亞然とか

うがへ定めて、いよと藤垣

の指をりにつらねはべるべ

きよしを申つかはしける紙

のおくに

櫓の火にとく煤けよとおもふ名ぞ  
櫓に寐し旅人狸にてありつ  
冬を住まば山邊の事よ手柴こる  
画曆になどて火桶は書ざりし

草庵の客僧を旅立する時

巨燵から寐にゆくさへもわかれ哉  
あやしみし煖婆を我も抱きけり

川ひとつ越る個局ながら、

磯家の哀れさらに、江戸橋  
のもの音聞ふる地ともしら  
れず。

衾干す軒も主やら隣やら

同住よしの社にて

片そぎや紙衣の垢を恥申  
紙衣召す刀自の袖棲薫る哉

麻露庵が此年の冬を訪し  
けるに

紙衣ニツ老と貧しと着重ねし

みちの爲には六ツも七ツも

暖年ふやしてさびたがるよ

かみこ着し我をしかるか鴨の聲

紙衣着ん富る式部を妻にして  
蒲團着て寐るや小だてに持佛堂  
炭竈と聞さへふけし月日哉  
をれ火箸笑ふなこれは炭の鞭

日のつまる沙汰も過けり石路の花

小文庫有磯海等の詞を聞ん

と云加賀の甘谷に

かり寄た木馬すえるや枇杷の花

墨田川に妻しある家を忘れ

て、廿日餘り藤丘なる浦人  
が亭に俳諧をいどむ。

茶山花を折とて見たり爪の伸  
花さくをとりえに置や古茶木

うつくしう人もかうなれ枯尾花  
水鳥を見て見かへれば枯尾花  
枯葛や何ぞと聞ば呼ましら  
菊がらや佛の花も一からげ

さがみの國もろこしが原に

あなる筆草を硯にひてると

て

やまと假名かれ草もても書れける  
枯あしや雪のちらつく風の跡  
蘆に舟まこと人目もかれにけり  
はちす葉のあまりといへば枯にける

こと葉の主になり侍るべき

のふるきを爐扇の雨鳥亭に

説盡しける時

泉も柏かれての体たらく

今はとてなれも枯たかかれかしは

天龍の喧嘩きこゆるかれ野哉

岩澤のわたし信濃川最第一

の急流とかや

岩澤や水に追れて飛木の葉  
木葉ちればけちかき鳥も山路めく  
隣る木もなくて銀杏の落葉哉  
藪陰も落葉しにけり何くれと  
がさつくや膳棚までもむら落葉

驚雪雲人蘆庵等こぞりては

やく上手にならんと知りあ

へるに

まつ事の至極なるべし麥を蒔  
冬されやさぞ鎌倉の麥ばたけ  
蕎麥刈に道かりたれば瀧のうへ  
稗刈し跡のみ見居る山の冬

犬の子も干さるゝ數や芋がしら  
杵ほどの蕪引得たりすて畑  
葱白しまとの冬になるほどに  
鶴の脛長しとなくか冬田つら  
冬更ぬ田にしの穴のみゆる迄

水鳥

水鳥も鬪諍さまは見にくしや  
水鳥の入まはりけり津久井縣  
鴨なくや雪にもち込南じけ  
水鳥のあくたにつくや冬のおく  
鶯鴨よ延喜の御代の鳥ならん  
小鴨にも餘所々しさを都鳥  
水鳥の鷹に逃たるさむさ哉

千鳥

千鳥には嶋の木葉のなりつらめ  
鶉も二三度はしる千鳥かな  
舟の闇千鳥に沖洲しるばかり  
光琳が千鳥見よなら薄月夜  
狼もしづまる里のちどり哉  
千鳥鳴や簾かけ一人乗るわたし

冬更てみな番鶴にみゆる也  
薪割し跡にも来るや冬の鳥

こわいもの見たしそもくふくと汗  
河豚のつら憎しといふはおもふより

わすれねばおもひ出さず

いと書し高堆がふみをい  
い出て、如毛顔に此句を

感ず。

手さぐりや乾蛙はづす壁の釘  
から蛙をとふくはで仕舞けり

くらき夜のはり合になる冬至哉  
孫殿も寐處かえん冬至かな  
子祭によごれん料か松の椿  
禰宜殿を行逢客や大師講  
きさらぎの花に死ぬ氣かはち敲  
鉢たゝき明るあしたもないやうに  
定盛もさぞや雪吹の手しま蒨

雪

はつ雪や入院の僧の禮まはり  
初雪や宇治の小茶師がひとり釜  
雪國のはなしはうそでなかりけり  
たのまれて聞ふる鐘や雪のくれ  
くれの雪刀根もうめたか鶴の歸る  
雪の日やゆゝしき家の水遣ひ  
雪風や鶴の目つらに吹そびき  
鳩なくや雪になりきるあたゝかみ  
雪になる風さきひくしなく鶴  
一茶が清貧を尊とむ  
塵とては梅の古葉を庵の雪

雪の日や鹿の素通る濱の町  
豆がらにつくや鳥も由喜の鳥  
雪國はことに大事の後架かな  
菴雪にとちて弘智の無物おもほゆる

傘さしかけさせたる傾城の  
讃に

京町の遠きにほこれ袖の雪  
在寺や天井張らぬ雪あかり  
伊勢の蟬も寐る日のあるかつもる雪

山里や雲さへ來れば霰降る  
あられふる<sup>す</sup>のまがきや子はほしき

馬酔木忍冬しどろに枯残り  
て、手兒女が井はかしこに  
見ゆる。

みぞるゝや雪にあれたる小笹原

山田の畔の枯すゝき刈人な  
しにとよめるにもよりなん

刈人もなき伏蕨に冬の雨  
冬の雨水にしむと思ひなす  
禪門の藪さがしする水かな

くさくさと家鴨のよこす氷かな

松風も氷り付たか寒の入  
折つゝもまゝしからぬ冬の梅  
死なれたる和尚は損よ冬椿  
寒念佛子の爲ならばをくまいか

老懷

鶯と寐ん戀もしけるを寒苦鳥

節季候よおれが衾はとうはやす  
節季いも來ずなる餅のさはき哉  
花穀を炭團の饅を菴の煤  
炮録はいつも有ふにとし用意  
何くぞ土たく家の年用意  
芝生まで聞へて寒し年の市

うは置の干菜割むもうはの  
空と聞えし郎ぶりなるべし  
いまだ名子とも水のみとも  
わかれぬ譜代どもの、匹當  
せし夫もなくて、麥つく白  
のかげに産血こぼすをあな

がちに咎めず、庭子とよび  
て育つるにぞ、三世のみな  
みおもはれてとにこのもし  
くれくると鬼追ありく庭子哉

今日を捨て明日の俳諧に生  
よと云事をノ且坊に示す

鬼よりも古みをやらへ菴の豆  
よし野下りる心はせぬぞ豆まく夜

春と云ものにはだされたれ  
ば、唱へ殘せし御名をもお  
もはず。

小窓から見てもみゆるや年のくれ  
色かえぬ硯洗ふて年とらん  
鉢僧もなしめば哀れくるゝ年  
松の葉も簾にあへば年の塵  
梅土筆とらへた富を庵の年  
としの夜やむかひ合ふ樹のかたるさま

三國嶺三社權現法樂  
赤城をおがみて、先今日の  
道行ぶりを明し奉る。

月雪に瘦るまことを見せ申

彌彦へむかひ奉りては、い  
よく修行の實にいたらん  
事を、

鵲の巢鳥の聲も聞んな

諏訪の御社は此行の終りに  
まいらんと思あてたるにぞ

こどゆともしなぬの神よかへしませ

小千谷より長岡へ送り下る

舟中、誰かれ、中にも寒が  
るあたまの巢也坊をば、荷  
物の間へおしこむ。

おとなしう疝氣も聞よ械の音

六人を包んで嬉し雪の筈

みの笠打かつぎ、さかさ井

のわたりまかりける、かた

へに常よりもとおぼしき小

寺の侍るを、人にとひけれ

ば、竹之坂寺と申はこれが

事也と申ければ、竹之坂と

は誰が事ぞと又問ければ、

市村羽左衛門が若衆なりし

時の名にして、其まゝ竹之

坂が墓はあれにてはべる也  
と申ける。いと哀なりけり。

ふりよくとて時雨の竹之坂

都樂の山寺に詣てはべる。

よしなき樵の道をかてて登

るほどに、葛にとりつきつ

づらにかくれ、鹿の跡鬼のあ

がをしるべにたのむ徑のあ

やしくおそろしけれども、

前世にくるしむは後世の樂

しからん種也と思ひあてゝ

登る時の苦しさはその儘下

る時の安からんをとて、つ

とめて汗を霜雪にそゝぐ。

なか／＼に冬こそよけれ乗さす

草菴もと丈草が貧に譲らず

といえども又一長物在。

着ても寐るこれやまとのかくれみの

今一聲のきかまほしさに

山路くれぬ處の人の眞似をして

人世莫爲婦人身

百年苦樂因他人

をうなの事を解して才發な  
る、やゝもすれば肝火の高

ぶりて、一重梅のさびしく

散はつるの多きを、梅夫が

小娘のはまもにいましめん

とて、二行物語であたへた

る也。猶又何あり。

墨しらぬ硯になるな玉ぞとて

はいかい文字有すらくるし

と覺へて、秋のくれのどこ

とらまへんけじめもなく、

遊びありかんののみ申さる

るの古意にうなづきつゝ、

榮年の雅號ひとつを考訂せ

しむるとて、

ありがたや繩もむすばぬ世のこゝろ

角田河四時

身のうくてちる花見ばや角田川

苗うる雨がふる也すみだがは

三日月も見聞あるもの隅田川

月雪に換てしづけし墨田川

俳諧書鋪

江戸本石町

西村源六